

本土からフェリーで片道約3時間。
 日本海に浮かぶ隠岐諸島の一つ、中ノ島の海士町は、
 かつて自治体消滅の危機にひんしていた。
 その劇的復活の中心にあった地域唯一の高校は、
 いま、島内だけでなく県外からも生徒を集めるまでになった。
 いったいこの島に、どんな学びがあるのだろう。
 学習塾の仕事や執筆のかたわら、
 島の教育にも携わっている清水章弘先生とともに、
 都会とは違う環境で学ぶ高校生たちの声と、
 高校生たちを支える人々の夢を聞いた。

文・編集◎笛原風花 撮影◎荒川潤
 取材協力◎海士町、隠岐島前教育魅力化プロジェクト



夏の特別編
清水先生へ行け。

[今回の舞台] 島根県立 隠岐島前高等学校
 (島根県隠岐郡海士町)

西ノ島

西ノ島町

海士町

中ノ島

知夫村

知夫里島

株)プラスティー教育研究所

代表取締役

清水 章弘

1987年生まれ、千葉県船橋市出身。東京大学大学院(教育学研究科)修士課程修了。大学3年の20歳で起業し、「勉強のやり方」を教える学習塾を東京と京都で経営しながら、全国さまざまな学校・教育委員会・企業の教育アドバイザーを務める。著書は『東大学生が知っている! 努力を結果に結びつける17のルール』(幻冬舎)など多数。監修・出演にNHK Eテレ「テストの花道 ニューベンゼミ」など。

海士町は隠岐諸島の中ノ島に位置する自治体。日本史選択の読者のみなさんは、後鳥羽上皇や後醍醐天皇が配流された地としても覚えておきたい。

この町のフェリーターミナルを見下ろす丘の上にあるのが隠岐諸島島前地域で唯一の高校、隠岐島前高校だ。



離島の学校、復活の軌跡

“島消滅”の危機を 学校が食い止める

いまから十数年前、海士町は急激な少子高齢化と過疎、財政難に大きく揺れていた。中でも、地域唯一の高校である隠岐島前高校を卒業した若者たちが島を出て戻らず、児童・生徒数の加速度的な減少につながる状況は、島の存続にかかわる事態となっていた。

2009年(平成21年)、海士町と西ノ島町・知夫村の島前3町村は同校の島内および島外からの入学者増をめざす「隠岐島前高校魅力化構想」を島根県に提言。生徒「一人ひとりの夢の実現」をキーワードに、特別進学コースなどの魅力的なカリキュラム編成や部活動の魅力化、国内外からの留学生の受け入れなど“魅力化プロジェクト”的取り組みが始まった。

生徒たちが発掘した 島の魅力



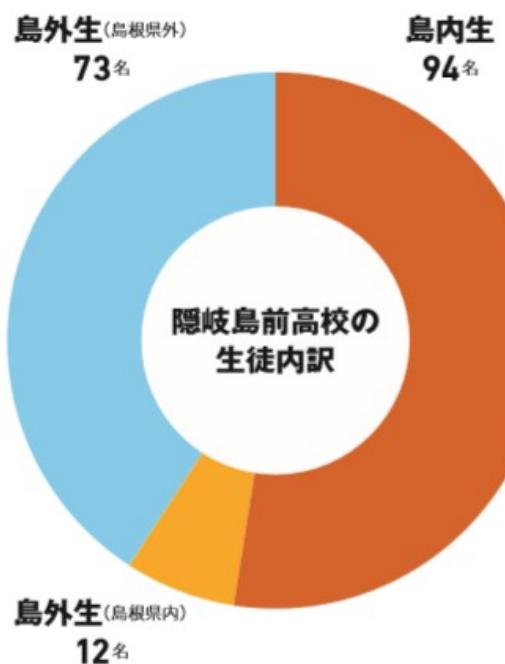
魅力化プロジェクトの中でも、隠岐島前高校の生徒たち自らが取り組み、輝かしい成果を生んだのが「ヒツツナギ」だ。高校生が地元の観光プランを考え発表するコンテストとして2009年に第1回大会が行われた「観光甲子園」(全国高等学校観光選手権大会)への出場をめざして集まつた生徒たちは、考え抜いた末に「人こそが島の魅力であることを発見。観光地ではなく「島の人々との出会い」を軸にした「ヒツツナギ」

ツアーやプレゼンテーションは本大会で見事グランプリを獲得した。「ヒツツナギ」の活動は現在も隠岐島前高校の部活動として活発に続いている。

隠岐國學習センターの設置と 「島留学」スタート

魅力化プロジェクトのもう一つの大きな柱である「学力向上とキャリア教育の充実」を実現するため、2010年(平成22年)には学校・地域連携型公立塾「隠岐國學習センター」が開設。この學習センターでは主体的に自ら学ぶ力を育む「自立学習」と、対話や実践を通して自分の興味や夢を明確にしていく「夢ゼミ(課題解決型プロジェクト学習)」の2つのカリキュラムを通じてグローカル人財育成をめざしている。

また、翌2011年(平成23年)には「島留学」制度を利用した島根県外からの生徒が初めて入学した。2018年現在、隠岐島前高校には海外出身者も含む73名の島留学生たちが、寮生活をしながら島の生徒たちとともに学んでいる。



「魅力化プロジェクト」発足以後、海士町に移住した人々の中には大企業や大学、官公庁などで教育の仕事に携わっていた人も多い。最先端の教育ノウハウを持った移住者と、「島の教育」の現実を知る地元の人々、双方の大人たちが力を合わせて生徒たちの学びを支えるしくみが、隠岐島前高校の教育がもつ強みの一つだ。

本土から片道3時間、フェリーは1日2便(冬季は1便)という物理的な距離に加え、町内にはコンビニもなく小さな書店が1軒だけという環境が学びにもたらすハンディキャップは、想像以上に重い。そんな“障壁”を越えて生徒たちと外の世界をつなぐのに一役買っているのが、インターネットをはじめとするICT(情報通信技術)だ。前ページでも紹介した隠岐國學習センターでは、映像通信回線が松江市にある外部のオフィスと常時接続されており、生徒たちは



まるで隣の席に話しかけるような感覚でスタッフに相談することができる。また、島留学生たちが生活する「三燈寮」を取り材した日、寮1階のホールでは宮崎県えびの市の高校とネット回

島内外の大人、高校生と大学生。 ここでは学びも“ヒツナギ”

線を結んで遠隔授業が行われていた。等身大の映像越しに隠岐と宮崎の高校生同士が討論する姿は、まさに未来を感じさせる。

学习センターは高校生たちの学びの場としてだけでなく、地域の人々の交流の場としても活

用されている。最近では、メディアなどでも頻繁に紹介されるようになった海士町に興味をもち訪れた大学生が、そのままインターンとして学习センターで働き始めるケースも少なくないという。隠岐では、大学進学は島を出ることを

意味する。つまり、かつて海士町は“大学生がない町”だったが、高校生たち自身が发掘した島の魅力がいま、島外の大学生をとらえている。まさに“ヒツナギ”が学びの機会を生んでいるのだ。

次のページでは、島の外から隠岐島前高校に入学し、寮で共同生活しながら学ぶ島留学生二人に、いまの想いを聞いてみた。



自ら学ぶ。地域と関わる。 島での学びは、ワクワクがいっぱい!

2年生・東京都杉並区出身
おうで
應手 楓太さん



本気で打ち込むものを この島で見つけたい

今、僕が一番楽しいのが、「夢探究」の授業です。島前地域の課題を見つけてその解決策を考え、最終的には島前の観光プランという形にまとめ上げて、シンガポール研修時に英語で発表する予定です。中学生の頃は、覚えた知識が将来に役立つと思えず、勉強をする意味が見出せなかつたのですが、隠岐島前高校ではプロジェクト型の学習が多く、生きるために必要な力を身につけているのだとということを実感できます。一方で、1年次はいわゆる基礎学力をつける勉強にはなかなか身が入りませんでした。学習センターのスタッフの方が親身になってアドバイスをしてくださり、2年生になってからは提出物を期限内に出せるようになりました。これは、僕にとって大きな成長です。この島に来いろいろなことに挑戦してきましたが、何かに本気で打ち込んだことがないというのが、僕の悩みです。高校生のうちにこれだと思えるものを見つけ、全力で取り組みたいです。

2年生・大阪府箕面市出身
まいへい
荒巻 韶さん



自分で考え、勉強することを 学んでいます

島に来た当初は、毎日が驚きの連続でした。とくに、人と人との距離の近さは最初は戸惑うほどで、釣りをしていたら知らない人に声をかけられて、釣った魚を料理してもらったこともあります。勉強の面では、高校でも学習センターでも、自分で考えたり自分の意見を話したりする機会が多く、先生やスタッフからの「あなたはどう思うの？ なぜそう考えたの？」という問い合わせようとして、次第に自分の中で考えが深まっていくのを感じます。島に来てから、勉強というのはやらされるものではなく自分が主体となってやるものなのだとということを、身をもって学んでいます。また、学習センターでは地域と関わり合いながら作り上げる「夢ゼミ」というプロジェクトがあり、昨年は島前地域を紹介する雑誌を制作しました。取材から編集、デザインまですべて自分たちでやり遂げ、大きな達成感がありました。ただ知識を詰め込むだけじゃない島での学びに、大満足です。

「ない」を嘆いてもしようがない。
でも、あきらめたら前には進めない。

隠岐島前高校がある海士町には、一般の高校生には当たり前のものが、「ない」。予備校も、コンビニも、欠航時には授業さえ「ない」。そんな島で暮らす人々の姿勢から成功のカギを見出すべく、島の教育改革に携わる二人が対談を行った。

「ないものはない、島で学ぶということ

大野佳祐さん×清水章弘さん対談



（提供：海士町役場）



第6回ゲスト
隠岐島前高校魅力化プロジェクト コーディネーター
大野 佳祐さん

1979年生まれ。東京都出身。19歳のときのバングラデシュ訪問を機に1年間アジアを旅し、教育・共育の場づくりを志す。大学職員として勤務する傍ら、2010年にはバングラデシュに小学校を設立するなど独自の活動を続けていたが、2014年に退職して海士町に移住。隠岐島前高校魅力化プロジェクトに参画し、コーディネーターとして本土と島を行き来しながら広く活動している。

清水 「ないものはない」という海士町のキャッチフレーズ、いいですね。

大野 これには、「ないものはないんだからしようがない」という意味と、「ないものなんてない、大切なものはある」という意味が込められているんです。

清水 深いですね。例えば高校生にとっては、島にはどんなものが「ない」のでしょうか？

大野 隠岐島前高校には船で通ってくる生徒や先生がいるので、悪天候でフェリーが欠航すると、休校になるんです。

清水 授業が「ない」ってことですね。しかも、急になくなってしまう。

大野 また、隠岐島前高校は島前地域で唯一の

高校なので、学力幅が広いです。実社会と近い構造なので非常に面白いと私は思っているんですが、都市部の学校と比べると、生徒一人ひとりのレベルに合わせた対応は難しくなります。

清水 ということは、学力を競い合うライバルの存在も刺激も「ない」わけですね。そして、他校との交流も「ない」。

大野 部活で県内の高校と練習試合をするにもTOEICなどのテストを受けるにも、2泊3日は必要なので、機会は限られています。

清水 一般的な高校生にとってはあって当然のものが、「ない」。このハンデを、島の高校生はどう乗り越えているのでしょうか？

大野 乗り越える、という発想はないと思いま



す。受け入れるしかないと。授業が急になくなつて、ふと時間ができたら、何をしようかなと考えますよね。島には遊ぶ場所もないけど、その中で何かしようと自分で考える。これって、すごくクリエイティブなことだと思うんです。

清水 ハンデやアクシデントは抗うものではなく受け入れるものであり、受け入れたうえでどうするかを考える。この島の高校生の在り方、考え方から学ぶことは大きいと思います。ハンデやアクシデントって、どんな受験生にも何かしらあるはずなんです。夏まで部活をやっていたとか、家庭の事情で塾や予備校に通えないとか、大事な試験の前日に風邪をひいたとか。そうした状況に陥ったときにどうするか。不運を嘆くか、何かのせいにしてあきらめるか、それとも、その状況の中でできるベストを考えるか。どの行動が成功につながるかは、明白ですよね。

大野 なんとかしないことには、前に進めませんからね。キャッチフレーズの話に戻りますが、「ない」なら、どうすればいいかみんなで考えていこうよ、というのが隠岐島前高校のスタンスなんです。例えば、他校生との交流が物理的に難しくても、今の時代はICTの力で遠隔地とも簡単につながることができます。実際、学習センターでは遠隔地の高校生とディスカッションをするような授業も行っています。

清水 たくましいですね。そして、大人も楽しそうですね。

大野 大切なのは、「ない」という状況をいかに楽しめるか、ということだと思います。自分に「ない」ものにこだわるのはやめて、「ある」ものを探してそれを磨けと、周囲の大人は言うかもしません。でも、「ない」今までなんとかする、

という発想があつてもいいのではないですか。それってとても、ワクワクすることです。

清水 同感です。ない状況のままなんとかしよう、という思考やそこから生まれる発想力は、人生のさまざまな局面で役立つはずです。受験生には、「もし〇〇がなかったらどうするか」を考える「ないものはないトレーニング」をぜひ実践してほしいですね。例えば、もし試験本番で計算スペースがなかったら、とか。

大野 もしトイレにトイレットペーパーがなかったら、とか(笑)。

清水 そうそう、いい感じです(笑)。

大野 海士町には、「ある」ものもいっぱいあるんですよ。キレイな海、美味しい魚、そして温かい人たち。螢雪時代の読者の皆さん、大学生になったら、ぜひインターンとして島に来てくださいね。

「ない」ことを受け入れる強さをもとう



大学入試本番にアクシデントはつきもの。出題傾向が急に変わって、準備してきたことが使えないかもしれない。手がかじかんで自由に動かないかもしれない。風邪を引いて頭が動かないかもしれない。あるべきものがないという“最悪”的状態を嘆くよりも、「ない」ことのあるがままに受け入れ、そのうえで「何ができるか」を考える隠岐の高校生たちに、僕は強さを感じました。

この夏から秋にかけて、みなさんも模試を受験することでしょう。模試を常に本番のようにとらえ、「ないものはない」の精神を忘れずにトレーニングを実践してみてください。そして、アクシデントに負けない力を身につけるところまでが、本当の意味での学力と言えるのかもしれません。